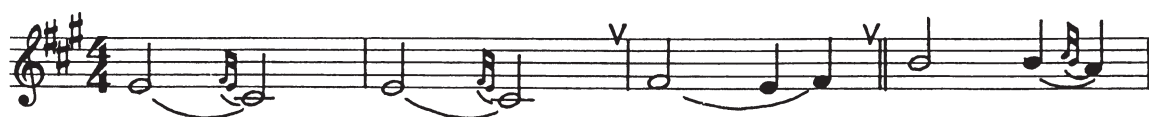


第五番 勝尾寺二階堂の御詠歌 (紫雲調)

(柴の戸の御詠歌)

♩=40

松 濤 基 作曲



〔詠頭〕 ○ × × ○ × × ○ × × ○ × ×
し — ば — の — — と オ —



○ × × ○ ○ × × ○ ○ × × ○ × ×
に あ け く れ か—か—る し —



○ × × ○ × × ○ × × ○ × ○ ×
ら — — く ム も — を い つ む ら—



○ × ○ × ○ × × ○ × × ⊗ ×
さ き—の い ろ に み な さ— ん

第五番 摂津の国 勝尾寺二階堂

柴の戸に あけくれかゝる 白雲を いつ紫の 色に見なさん
(法然上人御作)

法然上人は讃岐の国の配所に約9カ月滞留された後、承元元年(1207)12月、ご赦免の宣が下りました。しかし、まだ京都に入ることは許されず、摂津の国^{かつおじ}勝尾寺の^{にかいどう}二階堂にお住まいになりました。ここは平安時代、勝如上人が長年無言の行をして浄土往生を願いましたが、夢で^{しやみ}沙弥教信のお告げにより、ひたすら念仏の行に励み、そして最期念仏往生された地です。このお念仏に御縁の深い草庵で法然上人79歳、建暦元年(1211)11月、帰洛の宣が下るまでの約4年間、毎日六万遍七万遍と^{ねんぶつざんまい}念仏三昧の日々を送られました。お年も召されたのでここを最後の地と思われ、このお歌を詠まれたのでしょう。

大意 勝尾の山の小さな草庵に、朝夕白雲が掛かっています。私の命が終わる時には、み仏様が必ず紫の雲に乗って、お迎えに来て下さることを信じております。そう思う時、あの白雲が紫の色になるのは何時の日でありましょうか。早くお迎えをいただきたいものであります。

ポイント注意

- 「あけくれ」の強弱のリズムを強調します。
- 最後の「いろに」の「ろ」に付してある符は洋楽の装飾音ではなく、和楽の特徴の発声で、そこが三拍目の強声の出となります。